

グロツツの「ギリシア都市」における

「集团的自由」について

霞 信三郎

フヌステル・ドゥ・クーランジュ (Fustel de Coulanges) にあつては、古代ギリシアのポリス (Polis—都市國家) における一切の自由は否定されなければならない。と云うのは、彼において「都市は宗教に基いて建設され、あたかも教会のごとくに構成されていた」からであり、「都市の力はそこに淵源し、またそこから都市の全能や市民の上に行う絶対の主権も由來した」からである。そしてこのような「原則の樹てられた社会には、個人的自由は存在するこゝとが出来なかつた」からである。つまり、市民は精神も肉体も共にポリスに隷屬していて、経済生活において、ポリスが必要とあれば——婦人の宝石を含めて——凡ゆる市民の財産を無償で提供させることが出来、獨身、結婚等の私生活においても、その自由は禁ぜられ、又スパルタ (Sparta) ではポリスのために死んだ子のために母は笑み、しからざる母は泣くべきものであるというように、心情の生活においてまでも規定していた。更に「ポリスは市民の身体が畸形や歪形であることを恕さない権利」をもつていて、そのような「子を産んだ父親に対しては、これを殺すことを命令し」さえした。このようにして、勿論政治、法律、裁判、教育、宗教、道德に関して何一つとして市民には

自己の自由はなく、自由があるとすれば、それはポリスの命ずることに對して、自己の意志において実行する自由だけであつて、それ以外に自由はなかつた。「従つて、古代都市において人々が自由を享有していたというのは、人類のあらゆる誤謬のうちで最も奇妙な誤謬である。古代人は自由なる思想の片鱗さえ有たなかつた。」

以上、我々がクーランジュがその著「古代都市」(La Cité Antique) 二六五頁から二六九頁において論じているところから理解されるところのものは、ポリスの人間にとつては個人性も私生活もなく、祖國の利益に従う以外に人間の生活と名づくべき何物もなく、公共的生活に自己を埋没することによつてのみ人間の存在を許されるとするであつて、それ以外に一切の自由はなかつたと云うことである。

ところで、このようにクーランジュをしてポリスの全体主義の下に個人の自由を否定し去らしめたものは何であるうか。それは以上のべたことと關聯するのであるが、彼の「古代都市」一四五頁から一五一頁にかけてのべているように、その根源はポリスの形成された基盤に發するものであつた。即ち彼によれば、ポリスは眞実に血統、出生、親族などの血縁關係を意味する氏族 (gens) を社会構成の單位として形成されたのであつて、氏族が拡大したものが氏族團 (Phratres)、氏族團の更に拡大したものは部族 (philo) であり、それが更に拡大してポリスが形成されたとするのである。しかもこのように氏族が拡大していつても、それらの集團は一方には、それぞれ独自の祭祀と集會と首長とをもつてい、他方には、ポリス形成の過程は共同の祭儀を紐帶とする神の觀念の拡大に求めらるべきものであつた。かくしてポリスは眞の意味で宗教的團體であるとし、ここにポリス形成の淵源を把握するのである。

さて、以上のようにクーランジュはポリスの基本的性格を宗教的團體と把握するのであるが、宗教的團體はその敎團的性格から、信者以外の團員、團體に對して閉鎖的であり、排他的であることを一般とする。かくして又内部の成員に對しては全体性、非自由性、反個別性をもつてのぞむものである。しからば、クーランジュにおいて把握された

ポリスもまた、その成立の始めから、外部に対しては閉鎖性、排他性を、内部の成員に対しては全体性、非自由性、反個性主義をとるものであつて、教團性が強ければ強いほど、一切の自由が否定されると云うことは当然理解されるところであらう。

このクーランジュの見解に対して、グロッツ (G. Glotz) は二つの方面から反対を表明する。その第一の(一)は「自己防衛はその最初の必要であつた。その最も早い時代においてさえ、ポリスは敵軍又は海賊團におびやかされた時に國民が逃げることの出来た丘をもつていた。殆んど常にそれは一つのアクロポリス (akropolis)、又はそれ以上のアクロポリス (Akropolis) さえもつていた」⁽¹⁸⁾とのべることによつて、ポリスは、外敵に対する逃避所としてのアクロポリス (高市) をもつていたばかりでなく、ポリスを防衛する固有名詞的城砦としてのアクロポリスをもつていたとして、ポリスの起源を自己防衛をこととして成れる防衛團體と見るることによつて反対論を展開するのである。

* ⁽¹⁸⁾ 内の数字はグロッツの「ギリシヤ都市」(G. Glotz, La Cité Grecque) の頁を示す。

その(二)は、彼は「あらゆる都市が、あらゆる家族が神々をもつていたように、その神をもつていた。丁度親族たちが家族の炉邊の祭壇の前に集つたように、そのように市民たちは共同の炉邊 (kouz, euria) の前で、その都市の宗教の儀式を挙行するのである。そこでは國民の上に神々の保護を招くためであつて、犠牲が捧げられた」⁽¹⁹⁾とのべることによつて、アクロポリスや城壁が証拠であるところのお互の防衛に対する必要は、丁度古代においてはあらゆる社会機能が宗教を中心のよりどころとしてでなければ営まれることが出来なかつたように、ポリスにおいても防衛の精神の中核をなすものはポリスの神、即ち宗教的神であるとして、グロッツはポリスはその起源を自己防衛に、その精神的支柱を宗教に求めて、ポリスとは防衛團體であると同時に、宗教團體であるとするのである。しかればグロッツはポリス形成の原理をクーランジュ同様に捉えていたであらうか。

彼はクーランジュのポリス形成の把握の仕方を取りあげて、「彼が氏族から氏族團、部族、そしてポリスと進んでゆくように、著者が單純により大きな團體に、原始的團體の中に觀察された信仰や慣習を繰越すと云うことは明瞭なことである。冷靜な論理をもつて、彼は嚴格な比較によつて、一連の同心円の中心に家族をおくようにするるのである。しかし人間の社會はこの仕方では進展しなかつた。即ち彼等は幾何学的図形ではないのであつて、たゞ彼等が深い變化に耐える間は彼等の同一性を持続し、保持することが出来るどころの生きた有機體である」⁽⁴⁾とのべらる。そしてこのことは取りも直さず、ポリスはもはや氏族を超えた非幾何学的図形として形成されたものでなければならぬとするのである。かくしてグロツツに於ては、ポリスの神はもはや単に氏族的信仰の拡大されただけのものではなくて、内容的にも性質的にも變化をとげた新しい神であり、このような宗教を中核として成立したポリスは、彼の「十二世紀の終りに、そこへ相次ぐ波動をなして北西のあらゆる民族がやつて來た。そしてそれらの中のあるものは、後日ドーリス人として知られる筈のものであつた。混雜が大いに行われた。⁽¹²⁾古い君主政治は崩れ、そして没落した。しこうしてミュケーナイ(Mukennai)の繁榮は永久に消滅した」と云う言葉を引くまでもなく、その形成は紀元前十二世紀頃から始まつたドーリス種族の民族移動の前にミュケーナイ文化は崩壊し、この民族移動による征服被征服、スノイクスモス(sunokismos 都市聚住)などによつて、ポリスは防衛をこゝしながらも、一つの戰友團體として形成されたものであつた。しからばポリスの形成は紀元前八世紀をギリシア史の開幕として、歴史上に登場した時には、もはや單なる氏族を、又その神を同心円の中心におく幾何学的拡大として形成されたのではなく内容的にも性質的にも全く變つた形で、つまりクーランジュの氏族社會の原理を壓倒して形成された戰友的、教團的精神共同體とも云うべきものであつた。

かくしてグロツツは反クーランジュの理論をポリス形成の仕方を中心に展開すると同時に、以上の所論との關聯に

において、第二に、彼はクーランジュのボリスに於ける一切の自由は否定されなければならないと云う主張は偉大な誤であるとして次のごとくのべる。「十九世紀の自由な学派を支配したところの原理に従つて、彼は都市と個人との間の絶対的な二律背反を確立したのであつた。しかるに反対に國家權力と個人主義とは並んで進歩し、各々が相手を支持したのであつた。それ故我々は家族と都市と云う二つの反対の力を見ないで、——三つの力、即ち家族・都市・個人の各々が立ち代つて有力であるのを見る。ギリシアの制度の歴史は、このようにして三つの時期に落着くのである。即ち先ず第一に、都市は注意深く彼等（都市——筆者註）の権利を守り、すべての彼等の成員をして共通の善に服従させるところの家族から組成されるのである。第二番目に、都市は解放された個人をその助力者に呼ぶことによつて、それ自身に家族を服従させるのである。第三に、乱暴狼籍を極めた個人主義が都市を破壊し、一段と大きな國家の形成を餘儀なくさせるのである」と。

けだし、彼は個人主義の存在と成長とが個人主義が極端な暴力を振わない限り、ボリスに於て許されるものであつたことを認め、ボリスにおいては國家權力と個人の權利は相即的であり、平行的であり、互に推進的に展開されたのであつて、都市と個人の自由との間に絶対的矛盾はなかつた。そしてそのことを彼の史観に基いて実証的にのべることによつて、クーランジュに対する第二の反論を基礎づけるのである。

以上グロツツの反クーランジュの理論は第一、第二と二つの面からのべられた。しかしグロツツがボリスを防衛團體とし宗教團體として把握したとき、我々によつてクーランジュが把握した宗教團體としてのボリスと比較して考えられることは、グロツツのボリスはその性格からして一段と閉鎖的、排他的であり、全体的、非自由的、反個性的であつて、個人を全面的にボリスに吸収して自由を許さないものでなければならぬと云うことである。しからば又彼のボリスにおいては、個人との間に絶対的な二律背反はなく、國家權力と個人とが並んで進歩し、各々が相手を支持

したと云う理論は崩れ去るかに見える。

しかしグロツツは却つて逆説的に反クーランジュ理論の基礎づけを前に論じたこととの關聯において、先ず合議の發展としてポリスがプリユタネイオン (prutaneion)、それからブルーレウテリオン (bouleuterion)、評議會 (boule)、民会 (ekklesia)、アゴラ (agora) をもつたことによつて自由が存在したことの論拠を求め、これらの機關の機能を実証的に説明することによつて、クーランジュの見解に反対の理論を展開してゆくのである。

先ず第一に彼は次のようにのべる。即ちポリスの祭壇である共同の炉邊は、初めは王の宮殿として一人の王によつて政治が行われたが、それが共同の炉邊の下に崩壊すると共に、もと／＼一人の王を意味したプリユタニス (prutanis) が王たちの複数を意味するプリユタネイス (prutaneis) の合議による統治の場所としてプリユタネイオンとなつた。しかもポリスでは統治をこの少数のプリユタネイスだけに委かしておくことが出来ないで、王制時代に王のまわりに長老 (gerontes) とか相談役 (boulephoroi) とかしていた貴族たちが、その衆知を傳えなければならぬとしてプリユタネイオンの傍にブルーレウテリオンをつくつた。更にこの方向の發展として、代つてポリスの代表者たちによる評議會がつくられその一段と合議の方向を進めたものとして民会が存在した。しかしこの合議の仕方が一段と日常性をもち、しかもこの合議を徹底する市民大衆の集合所としてアゴラをもつようになつたことをポリスの特徴であるとして彼は強調するのである。⁽¹⁹⁾ 彼によれば、アゴラは「市場」⁽²¹⁾ である。しかしながら、この「市場」はたゞ單に商業上の取引の場所ではなかつた。何故かと云うと、商人と顧客とが一緒になつて、そこではゴシップと漫然と歩く人との混合があつた。二六時中、人々がぶらぶら歩いたり、最近のニュースを知つたり、政治を談じたりした豫定集合所 (dezevous) であつた。そこから、アゴラは最高の議會として評議したと同様に、人々に対してそれは政府によつてなされた決定を論議する様に王や貴族政治の指導者たちによつて召集されたのである。⁽²¹⁾ かくして我々に理解されるア

ゴラは、明らかに民衆の充分な議会の役割を果すために準備されたものであつた。

ともかく、グロツツはアゴラのもつとも重要な意味を、市民の公の会合の場所であり、公の意見や輿論が形成される場所であつたとする。しかも尙彼はアゴラは時代がすすみ、ポリスによつてその名稱は異なることもあつたが、アゴラはギリシアのポリスにとつて特徴あるものであつたとして、アゴラをもつてギリシア人をペルシア人からもつとも区別する制度であるとする⁽²³⁾。又これを民会との対照において、「民会と云うのは人民の議会に対する一般的術語である⁽²⁴⁾」として、これとそれとの相異は「アゴラを市民生活の本質的條件と考えることからギリシア人を妨げるものではない⁽²⁵⁾」とのべて、民会がその誕生をアゴラにもつていふことをのべるのである。そしてアゴラをもつて市民生活の本質的なものを表現するものであるとする。しからば、このようにブリュタネイオンからブルーテリオン、評議会、民会、アゴラへの発展は何を意味するであらうか。

それは全般的にみて、合議によつてすべての人々が納得出来る道を見出そうとするものであつて、合議即ち語り合ひによつて、理性を發見し、この理性の導きによつて一人の王の支配から貴族たちの支配へ、少數者の支配から多數者の支配へ、王の法則から人民の法則へ、又独断的支配から輿論の支配へと、明るい自由な人倫組織をもたらそうとする努力であり、又それへの進歩を示しているものであると考へることが出来る。そしてこのようにギリシア世界のポリスが發展的にこれらの制度を有つたことをのべることは、グロツツがクーランジュのポリスには自由がないと云う論議に対して第一の反対論を展開したものであると見ることが出来ると思ふ。

さて、第二にグロツツは人間が合議によつてあますところなく明るい法則の下に支配されてゆくためには、ポリスはその領土と人口に於て制限され、それがポリスの自由を醸成するとする。即ち先ず領土の廣さに関して、彼は「スパルタとアテーナイ(Athenai)とは領土の廣さに関しては例外である⁽²⁶⁾」が、それにしても「スパルタはペロポネ

ンス (Peloponnesos) 半島の五分の二⁽²⁴⁾を支配し、「アテーナイはただの一、〇六〇平方哩」⁽²⁴⁾にすぎないとして、その狭小性を語り、もともとポリスは「教唆離れたところのどこにも、國境として奉仕している丘」⁽²⁸⁾をもつものであり「ポリスは人々がただ本丸と云うべきアクロポリスに登れば、すべてが見おろされるほどのものであつた」⁽²⁸⁾とのべてポリスは量的に狭く小さいものであつたとのべるのである。又ポリスの數に關しては、「アリストテレース (Aristoteles) は彼等 (ポリス—筆者註) の中一五八を記述していた。しかし一〇倍以上もあつた」⁽²⁶⁾とのべて、もともと狭いギリシア本土 (九州より大きく、北海道より小さい——筆者註) におびただしい數のポリスがあつたと云うのである。しからばギリシア全土は局踏した一区劃によつて形成された小さい多數のポリスによつて形成されていたのであつた。しかも彼によればこのポリスの多數性がポリスの獨立の感情を昂揚し、この「獨立の感情が、いかに小さくとも、都市を主權國家につくつた。二つの隣り合つた都市につくり、あらゆる事柄が彼等を分割した」⁽²⁹⁾のであつた。即ち宗教、法律、曆、貨幣制度、度量衡、趣味、感情等に於て、皆そこに越え難い防壁を劃して行つたのであつた。ここに我々は、グロツツの「偏狭なしつと深い各個主義は、全民族をしてそれが常に必ずしも避けることの出来ない危險にさらしたのであつた」⁽³¹⁾と云う言葉をきくまでもなく、ポリス各個の強い獨立の感情と各個主義と、その偏狭さにもとずくポリス相互の血の斗争の繰返しを知ることが出来る。

次に人口に關して、彼は一般的には「ギリシア人を地中海のあらゆる海岸に散在させたところの移住の着実な流」⁽²⁵⁾の原因は、土地がやせていることと人口過剰によるものと見てゐるが、しかし實際には植民は人口過剰からと云うよりは、第一に土地が不毛であると云う永久的原因と、第二に貴族による財産の獨占と、第三に遺言によつて土地を譲ると云う歴史的原因から生ずるのであつた⁽²⁶⁾。その上大家族にとつて、植民は人口の増大を防ぐ唯一つの原因ではなかつた⁽²⁶⁾。そこで「常にどこでもギリシア人は大家族を恐れた。そのような不幸を防ぐために存在したよりどころは、産

兒制限をなすことであつた。ヘーシオドス(Hesiodos)の時代でさえ、一家族一人(μονογενής τις)を訴えてゐた。彼等は無制限のマルサス(Marthus)の人口論に耽つてゐた。——即ち墮胎、幼兒殺、新しく生れた男女別あるものの遺棄に従事してゐた。あらゆることが慣習によつて權威づけられ、法律によつて寛容され、充分哲學者たちによつて是認されたのであつた。これらの理由のためにギリシアの都市はその領土の範圍が狭かつたと同様に、その住民の數に於ても少なかつた⁽²⁶⁾とのべるのである。

しかもこの狭小なポリスは市民にとつて「一そう烈しく深いところの一つの感情」⁽²⁷⁾をかもし出すものであつて、「市街や島や森や入江や——それは父祖の國であり、彼等の祖先によつて建設された國であり、我々の世代が一段と美しく繁栄したものにして残さなければならぬ國であつた」⁽²⁸⁾。つまり、「成年に達した男子が公式の宣誓をした時に彼の思想なり、彼の血液そのものは都市に捧げられ」⁽²⁹⁾、しかも「抽象的に、彼が敢えて肉体と精神とを捧げたのではなくて、實際に彼は彼の目の前に毎日毎日みたところのものに捧げた」⁽²⁹⁾のであつた。そしてポリスは「人々が愛したすべてのものであり、人々が誇つたすべてのものであり」⁽³⁰⁾、それなるが故に「各々の世代がそれを見出したよりも一段と繁栄あるものとして残すことをのぞんだところのものであつた」⁽³⁰⁾。しかばグロッツの意味するところのものはポリスの狭小と多数性とは、市民をして内面的には自己のポリスに対する親近性と愛着とを強く感ぜしめ、對外的には偏狭なポリスの各個主義は對他ポリスの意識を熾烈にし、この強い對他ポリスの意識と自己のポリスに対する親近感と愛着とが互に刺戟しあうことによつて、自己のポリスに対する「一そう烈しく深い一つの感情」⁽²⁹⁾たる祖國愛を生ぜしめたものであると云ふことになる。

さて、グロッツにおいて把握されたポリスの起源は防衛團體であり、宗教團體であつた。しかも戰友的性格と教團的性格とは、その性格から共に全体的であり、絶對的であり、閉鎖的であり、排他的であつて、個人をポリスの全体

に吸収し去つて個人の自由とは背馳するものである。又以上の條件にかたて加えてポリスの多數性と狭小性からかもし出される祖國愛は、又個人をみずからのポリスを他のポリスに優越させることと、ポリスの狭小性から個人の一手一投足がポリスの全挙動でもあるところから、個人を吸収してあますところなくポリスの支配下に潛伏させると云うことは考えられるところである。しからば却つてグロッツの理論の展開は、既に記述したクーランジュの「古代都市において人々が自由を享有していたというのは、人類のあらゆる誤謬のうちで最も奇妙な誤謬である」と云う主張を強く裏附けるかのように見える。

* クーランジュ「古代都市」二六九頁。

然るにグロッツはポリスには自由があつたと云つて、強くそれに反対の論陣を展開するのである。しかも彼はその自由を名づけて「集團的自由」(la liberté collective)⁽²⁸⁾とも、「ギリシア的自由」⁽²⁹⁾とも呼ぶのである。さてしからばグロッツの意味する自由とはいかなるものであろうか。

二

グロッツは「野蕃な世界は扱にくい専制君主と氣力のない集團から形成されていた。ギリシアの世界だけは、その意味のあらゆる充全さにおいて、政治的存在であるところの人間の定義に答えるものであつた」⁽²⁸⁾とのべて、古い東洋の専制君主國、即ちベルシアの臣民とギリシアの人間とを比較したときに、ギリシア世界の人間だけが政治的存在である人間の定義に應ずることの出来るものであつて、それは非專制的な、換言すれば民主的な人間に答えること出来るものであつたと云うのである。しかも彼はこのような専制君主から解き放されたギリシア世界のポリスは自治都市でなければならぬとして、「自治都市と云うものは、本質的な互に補つて完全にするものとして自由をもつて

いる」⁽²⁸⁾とのべ、「もしもその表現が使用されるとすれば、集團的自由であつた。何故かと云うと、個人的自由は存在したかもしれないけれども、同様にそれは欠くべからざるものでなかつた」⁽²⁹⁾と云うのである。まさに自治的都市であるギリシアのポリスにとつて本質的に欠くことの出来ないものは自由であろうが、それはポリスの全体の自由、即ち集團的自由であつて、必ずしも個人的自由ではないのである。従つていかに「ギリシア的自由をベルシア的束縛に對置」⁽²⁸⁾して、それを誇示しようとしても、それは集團的自由以外のものではなかつた。そしてそのことを、グロツツはその全存在がもつとも詳細な規則によつて束縛され、自由のないと考えられるスパルタから、嘗てスパルタが死刑にしたベルシア王ダリユース(Darius)の二人の使者の身代りに、生命を獻げて王の激怒を鎮めるためにやつて來た二人のスパルタ人に向つて、ベルシアの一人の太守が、何故お前達は勇氣を尊敬する仕方を知つているベルシア王の友になることを拒絶するのかと尋問したときの、その問に對する答において示そうとするのである。つまり、彼はその時スパルタの使者たる二人が「あなたは束縛と云うことは知つてゐるが、自由を経験したことがない。あなたは自由が快よいものであるかどうかを知らない。もしもあなたがそれを過去に経験してゐたならば、あなたは遠方から投槍をもつてではなく、接近して斧でもつて、自由のために戦うようにすゝめたでしよう」⁽²⁹⁾とのべた言葉によつて、その自由の内容を例証しようとするのである。

思うに以上のべた二人のスパルタ人の誇る自由は、人間としての全存在が身動きも出来ないほどポリスの規則によつて縛られ、むしろ個人的自由がないと一般に云われている種類の自由である。しかも尙、このような自由をもつて、彼等をしてベルシア的束縛に對して誇らせた自由はいかなるものであるべきであつたらうか。

我々は先ずこの自由はもはや少くともポリスとの關係において、個人がポリスの拘束を脱して、人間の尊嚴を基調とする自由とは異なるものでなければならぬと思う。次にこの自由はギリシア世界の自由である限り、スパルタ以

外の他のポリスに於てもスバルタ程極端でないとしても、同様に享受されたギリシア世界特有の自由であると思う。しからばグロッツがこの自由を近代的自由と區別して、集團的自由とも、ギリシア的自由とも呼んだ所以がここにあると思う。

さて、我々は既にグロッツから自治的都市としてのポリスが本質的な互に補つて完全にするものとして、自由をもつてゐる、そしてそれが集團的自由である⁽²⁹⁾と云う言葉をきいたのであるが、それは独立の自治的都市としてのポリスにおいて、國家権力と個人主義とがお互に補い合つてポリスを完全なものにする自由であることを意味するものであると思う。しからばその自由は、ポリスに於て「國家権力と個人主義とが並んで進歩し、各々が相手⁽⁵⁾を支持し、又支持出来る自由であり、その可能な限界においてのみ許される自由であつた。そしてその限り、それはポリスの存続を根本的要請として含む自由であり、それ故にそれは個人的自由とは異なる集團的自由であり、ギリシア的自由であつた。

しかもこれが所謂自由の名に價するのは、グロッツの「ともかく、自治と云うことは利益において富めるものであつた。各々の都市はそれ自身の性格、それ自身の個性、それ自身の生命をもつていた。その制度、法律、宗教、祭儀、記念碑、英雄によつて、共通の文化たる經濟的と政治的、道德的と理論的な諸原理を解明し、適用することによつて、各々のポリスは文化に無限の多様性を與えるように援助したのであつた。競争の成熟した精神は沢山の實驗を行わせ、模倣のうちにも獨創性を發揮させ、かくも小さい社会のあらゆる潜在していた力を實現するように、個人のあらゆる勢力に訴えたのであつた⁽³²⁾」と云う言葉から理解されるように、自治的都市としてのポリスは制度、宗教、法律など各々異つた個性をもつところから、各々のポリスはその文化に無限の多様な花を咲かせ、又個別主義を通じて熾烈にされた競争の精神は共同体の中に潜在していた力を實現するために、市民のもつ個人⁽⁵⁾のあらゆる力を引き出し、その力

によつて自己のポリスを他のポリスに優越なるものとしようとしたのであつた。

つまり、ポリスは対他ポリスの意識において、自己を優越なるものにするためには、個人を助力者と呼ぶことなくしては、その目的は実現されなかつたし、又事実個人を助力者と呼んだのであつた。しからば、グロツツの意味するポリスは——条件づきながら——各々の個人を解放して、十分に自己を發揮するようにしたと云うことになる。

以上グロツツによつて把握された集團的自由、即ちギリシア的自由はポリスと云う國家と個人との相即をもつて可能なる自由であり、ポリスの限界を出すことを許さない自由であつた。しかしポリスの個別性、ポリスの發展は個人の自由な發展をよそにしては考えられず、又個人の活動なくしてはポリスの發展を期待することが出来なかつた。

そして實際グロツツが個人の活動によつて、個人をポリスの助力者として呼ぶことによつて、ポリスの獨立性と個別性を顯著にし、ポリスの發展をなしたと把握していたことを考えた時、我々は個人の活動はもはやポリスの自由に対立するものであつてはならないし、又対立するものでないことを知ることが出来る。しかもこのようなポリスは個人に對して眞実の意味で全体的、非自由な關係にあることは出来ない。そこではポリスはその發展のために個人の自由なる活動の場所として、又ポリスは個の全体、又は個とポリスとの全体的一致を要求しながら、ポリスの獨立と進歩のために個の全面的な活動を許さなければならぬ。換言すれば、個の全体に對する獨立と自由をさえ許さなければならぬ。つまり、ポリスは進歩の理念に耐えるために個が全体に背反する契機を許すものとならなければならぬ。しからばここに我々は近代的意味の自由をさえ集團的自由の中に見出しうらと思ふ。

けれど、實際問題として個の獨立と自由なくして、ポリスの眞の進歩はありえない。この点からグロツツは先ずクローランジュの都市と個人の自由との絶對的矛盾を確立した立場に反對して、國家權力と個人主義又は個人の權利とが相並んで進み、各々相手を支持したとのべて、却つて自由を否定すると考えられるポリス形成の起源たる戰友的宗教

的性格も、地域の狭小性、人口の少数性も、多数のポリスの中で自國を顯揚し、優越させるために、ポリスと個人とをその思想感情において共同させ、個人が全体的調和、ポリスの調和的秩序のうちに位置をとりながら、ポリスが個人を助力者として呼ぶことによつて全体が常に個人と共にあり、又逆に個人が全体としての公共性であり、その調和にあずかることを共感することによつて、そこにむしろ個人は自からの自由を感じ、かくして個の自由が常に明るくポリスの公共性、ポリスの公開性の中にあつて、個人は決して孤立することがないと云う個と全、ポリスと個人の相即不離の關係、互に押し合はずにはられない關係を持ち続けたと云うのである。即ちポリスのもつ個別性、獨立性と個人のもつ個人主義、自由との調和を、彼は集團的自由、ギリシア的自由であるとのべて、これがポリスのもつ獨特の自由であるとし、こゝに古代ギリシアの人倫的意義を見出そうとしていると思う。

しかも彼はこの集團的自由の理想的に展開したポリスをアテーナイに求め、アテーナイに於ける集團的自由、ギリシアの自由を次のように語るることによつて、いよいよその性格を顯著にし、集團的自由の存在を強調するのである。かくて、このことによつてグロツツは反クーランジュの理論を決定的なものにするのである。

ところで、アテーナイなるポリスもグロツツによれば城砦であるアクロポリスを中心として形成されたものであり紀元前十二世紀の中頃から始まつたドーリス人のペロポネソス半島への侵入的種族移動を契機に、このアクロポリスの中に住んでいたエレクテイダイ (Erechtheidai) 一族が祭つていたアテーネー (Athene) の女神を中心に、それを崇拜する附近の村落を引寄せ、數多くの村落が連合してアテーナイを首府と認めることによつて、アテーナイの統一が出来上つたのである。つまり、スノイクスマスによつて統一が完成したのであつた。⁽¹⁷⁾ 即ちアテーナイはアクロポリスを中心に、女神アテーネーを祭ることによつて形成された防衛的並びに宗教的、換言すれば戰友的集團的團體であつた。又既にのべたようにグロツツがアテーナイもまた領土の廣さ人口の數において、狭く少ないものであり、

アテーナイ市民の祖國愛の強さは、彼の「サラミス (Salamis) の英雄たちが敵船に向つて自己を投じ、ソークラテース (Sokrates) がその法律に對する彼の尊敬において毒人參を呑んだ」と云う言葉が語つてゐるところである。

しからば我々がグロツツから理解されるところのものは、アテーナイもまた防衛的宗教的、又は戰友的教團的團體として、又領土の狭小性、人口の少數性、それとの關聯における祖國愛の強烈であつたことにおいて、一般のポリス形成の原理をその根底にもつものであつた。尙更に、彼が「アテーナイ人は彼自身土着であることを誇りとしていた。即ち彼の中には支配する民族もなければ、服従する民族もないと云うことを誇りとした。——中略——この同種の、そして自由な人達がスノイクスマスによつて、アッティカ (Attika) の人々をアテーナイ人とし、アテーナイを統一ある國民の首府とした」とのべ、「更にこのようにして最も遠い時代から、人種上の、地理上の同一が政治的平等の道德的及び物質的條件であつた」とのべていることからは、一面においてアテーナイはスノイクスマスによつて成つたものであり、征服被征服の關係において形成されたものでないことを裏附けると共に、他面においてそれは人種上の、土地上の同一が政治的平等の道德的及び物質的條件をなして成れるものであると云うことを理解するのである。しからば我々はアテーナイはポリス形成の原理をその根底にもつと共に、更にその成立の仕方としてスノイクスマスと人種上、土地上の同一をもつていたと理解しなければならぬ。しかも以上の事柄がグロツツによればアテーナイのデモクラシーとの關聯において語られ、それがやがて集團的自由の問題を語ることになるのである。

彼によればアテーナイの天職はデモクラシーの學校になることであり、それ故「全部の彼女の歴史は、彼女が完成すべきであつた民主主義的仕事の準備をしていたのであつた」⁽¹⁸⁾。しからば、我々はアテーナイを存在させる原理、又はアテーナイ市民の社會存在の原理はデモクラシーであつたと理解しなければならぬ。又彼によれば紀元前「五世紀の中頃までにアテーナイの民主政治の組織は決定的な形」⁽²⁸⁾をとるに至つたものであり、その時期である「ペリクレ

ス (Pericles) 時代には、アテーナイの政治生活は個人の権利と國家の權力との間に完全な均衡を示していた⁽¹²⁸⁾のであつた。更に又彼は「アテーナイのデモクラシーの立憲的原理は非常に單純である。——中畧——人民は都市に關する事柄において絶対の主權者であつた (κυριότατος τῶν ἐν πόλει ἀνδρῶν)」との言⁽¹²⁹⁾。

しからば、アテーナイの天職たるデモクラシーの學校と云われる理想の状態は、法を頭上におく人民主權が確立され、國家權力と個人の權利、又は個人主義の平衡にあるのであり、従つてアテーナイに於て個人の權利、個人の權力と平衡するまで個人主義、又は個人の自由を押し出すものでなければならなかつた。しからば又アテーナイにおける自由も一般的なポリスの自由と同様に、ポリスの限界を超えることを許さないけれども、一面では個がポリスと云う全体を押し出すと共に、他面では全体が積極的に個の自由を推進すると云う個とポリスとの調和において個が解放され、お互の發展が可能である自由である。かくては勿論既に論じて來たことからも理解せられるように、これはグロツツ的表現をもつてするならば集團的自由であり、ギリシア的自由である。ただこゝでアテーナイなるポリスの集團的自由と一般的な意味でのギリシア的自由との顯著な異り方を問題とするならば、それは既にのべたように、先ずスノイキスモスと云う征服關係をもたない平和なポリスの形成の仕方をその背景にもち、次に種族と土地、即ち血と土とを同一共通にすると云う信念に基づく平等な市民相互の間において押し進められたものであつて、こゝに平和性と非征服關係と平等性を基盤に集團的自由は、デモクラシーとして、一段と個人とポリスとの間に確乎たるものになつたと云う点である。しからば集團的自由はアテーナイにおいて、紀元前五世紀において、個人と國家と相即相推における理想的な可能の限界に達したものであると云わねばならない。

しかし、こゝで我々は重大な問題につき當るのである。それは例え集團的自由が理想的にアテーナイにおいて開花したとしても、この自由はあくまでも小さなポリスの限界においての自由であり、個人の自由を壓倒的に押し出す

ものではなかつたと云うことである。しからば、市民の自由は、よきにせよ惡しきにせよ、アテナイの目的と一致する限界内に於ての自由であると云う点で、眞の自由ではありえない。何故かならば、自由は本質的には國家も民族も超えた人間の良心、人類の自由でなければならぬからである。ここにアテナイにおいて顯現した理想的な集團的自由も紀元前四世紀のアテナイにおいて、個人主義の乱暴狼籍をもつて、衆愚化し、それが政治の面では衆愚政治としてあらわれ、國家權力と個人主義との不平衡において、集團的自由、ギリシア的自由の脆弱性を暴露し、ポリスを破壊するに至つた所以があつた。

實際グロツツは「第四世紀においては——中畧——人民は法律を超える主權でさへあつた(ἐπιπρος κει τὸν νόμον)」。第五世紀においては、それは王であつた。しかしそれは未だ僭主 (tyrannos) ではなかつた」とのべて、紀元前四世紀において集團的自由はその破綻を暴露せざるをえなくなつた理由を、人民が法律を超えるものであり、個人が國家權力を超越するものであつた点に求める。けだし、法律を超える人民の支配は、國家權力と個人の權利との不平衡を意味し、個人主義のあくことなき拡大である。

ところで、元來我々がグロツツから理解したアテナイは、法が主人であつて、國家權力と個人の權利とが平衡を保ち、集團的自由によつてデモクラシーが裏附けられているものであつた。そしてその限り、その正常が維持せられるものであつた。しかるに一たび人民が法を下僕にし、自由の限界を無限に拡大したとき、アテナイのデモクラシーが崩壊されると云うことは当然である。しかも衆愚政治は法を主人とする人民主權の下に、國家と個人との平衡において行われるものではなく、個人主義の過剩、自由平等の過剩において行われるものである。しからば第四世紀はアテナイのデモクラシーの崩壊の世紀であり、衆愚政治に突き落された世紀であり、集團的自由の脆弱性を遺憾なく暴露した世紀であるといわねばならない。こゝにグロツツがソークラテースやプラトーン (Platon) やアリストテ

レースなどの哲学者たちが、いかなる仕方でもと脆弱性を有するアテナイのデモクラシーを矢面に立てて排撃したかを記述した理由があると思う。⁽¹⁴⁶⁻¹⁵¹⁾

さて、然らば彼において論ぜられ來つた集團的自由は、いかなるところに詰論を求めようとしているであろうか。我々は、それは一面ではポリスよりも「一段と大きな國家の形成を餘儀なくさせる」ことによつて、即ちギリシア世界の崩壊によつて眞の自由が確立せらるべき方途をとるべきものであり、他面では哲学者たちの理性の眼によつて吟味せられることによつて眞の自由は確立せらるべきものであることを指向する点にあると思う。

けだし、グロッツによつて集團的自由と云われるギリシア世界の自由は、その理想的に顯現されたとするアテナイにおいてすら、ポリスの限界を脱することが出來ないものであり、個の自由を壓倒的に押し出すことの出來ないものであつた。否むしろアテナイにおいては、血と土とを同一共通にすると云う意識によつて、却つて市民の自由は伸長させられながら、いよいよポリスとの間に均衡のとれる自由として限界づけられ、ポリスの限界を出ずるべきものではないとされるに至つたのである。しからばそれは、眞の自由と云われる精神の自律、自己の胸に宿る人間性の尊嚴に対する極めて深い責任感に裏附けられた端的に理性的であり、普遍的であらうとして、そのために不断に戰闘的に精進すべき自由、人間の良心の自由、人類の自由と云つた近代的精神に發する自由とは背馳するものである。しからば又彼が集團的自由はギリシア世界の崩壊と哲学者たちの吟味において、眞の自由として確立せらるべきものであつたことを指向したと云うことは、けだし当然であると思う。

この小論は、昨年（二七年）日本大学において開かれた日本倫理学会の大会において發表した一部を新しく書きかえたものである。しかし、この小論はあくまでも、本年支給された文部省科学研究費補助金による「古代ギリシアにおけるポリス形成とその人倫的意義に関する実証的研究」の序説をなすものである。（一九五三・七・三一）